

住井すゑとその文学の里(三十七)

―牛久沼のほとり―

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

小川芋銭と犬田・住井夫妻

―「抱樸舎」の名前の由来―

犬田・住井夫妻は昭和10年(1935年)の7月30日に東京での生活を切り上げて、牛久沼畔の台地上にある犬田の生家に戻ってきた。

犬田家は近所の小川芋銭宅でもらいぶろをしていた。ふろ上がりに、芋銭から聞く老子・荘子の話が、卯の東京での修羅場の生活でささくれた気分を和ませた。その芋銭は昭和13年(1938年)12月17日に雲魚亭で71年にわたる生涯を閉じた。卯の翌14年1月8日の日記に「芋銭先生が亡くなられた。父を亡くしたような気持ちである」とあった。

一方の住井の場合は、芋銭との出会いによって、中国の古典老荘思想(文人画家が素養とした)に深く傾倒していった。住井は、田岡嶺雲(芋銭と交流があった)の和譯老子全・和譯荘子全を座右の書とし、この書を常に書齋の机上に置いていた。住井が昭和53年(1978年)に私財を投じて宅地の一角に建設した学習会場には「抱樸舎」と名付けた。抱樸舎

の三文字はそもそも犬田が、東京・小石川の寺院の庫裏の一室に間借りしていたときに芋銭が示唆を込めて書いて贈ってくれたものだった。『抱樸』の出典は老子(紀元前4世紀時代の中国の学者)の書物だ。住井の抱樸についての短い解説文には、「樸とは、山から切り出されたまんまのアラ木(原木)のことです。一見不格好で何のとりえもなさそうですが、手の施しようで、これは家や家具ともなれば、りっぱな工芸品、芸術作品にもなりますね。アラ木には多種多様の可能性が秘められているわけです。人間も、まさにそれと同じじゃないでしょうか。見かけは何のヘンテツもありませんが、うちに多種多様な可能性を備えているから、価値があるんです。素朴な心を抱きつづけること……とあった。

小川芋銭は、わが国の美術史上に「情趣豊かな独特の作風で『南画(文人画とも呼ばれている)』の新境地を開く」と記されている。該当する作品名は『水虎とその眷族』や『夕風』『狐の嫁』などで、これらが平福

百穂、小杉放庵らの新しい水墨表現と並んで、彼が近代文人画表現というべき新しい画境を開拓したことを示している」と評されているのだ。

ところで、南画は南宋画の略で、中国の明時代の董其昌(1554年〜1636年)が初めて説いた画派の呼称だ。董其昌は書(行書・草書)にも秀で、南画を文人画とも称した。文人とは高い教養を身に付けた、詩文の才能を持つ人の意味で、かかる人々が非職業的に描いた絵を文人画と呼んだのだ。

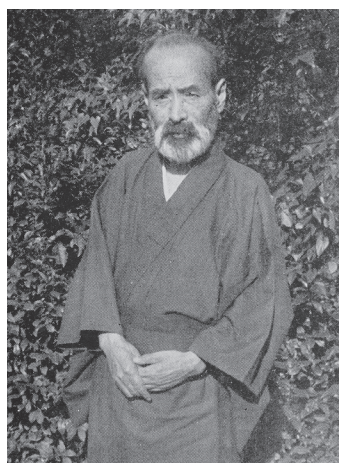
江戸時代中期にもたらされた南画の作品を模倣し、南画関係書物を唯一の参考文献にして、南画を描き、わが国南画の先駆者と呼ばれたのが、紀州藩儒官で漢詩人の祇園南海と、儒学者で漢詩人の服部南郭だ。

祇園南海の作品の影響を受けて、わが国の南画様式を完成させたのは池大雅と与謝蕪村だった。

江戸時代後期の南画を描いた画家を代表する田能村竹田(1777年〜1835年)は、幼少より田能村家代々の職である医(岡藩主御典医)を好まず、絵をたしなみ、経学文章を志した。身を常に文人の立場に置き、国学者上田秋成、池田藩大目付浦上玉堂、岡田米山人など京坂地方の文人画人と交流し、さらに終

生の友頼山陽ほか各地の文人とも親交を持ち詩画三昧の生活を送った。竹田の南画、つまり文人画の画論は「絵を描くのに、技術が未熟であることはそんなに嘆くほどのことではないが、精神の力が足りないということとは心配である。技術に巧みな人は、特に昔の優れた絵画を模倣するのを得意とするものであるが、精神の充実した人は、独自の立場に立つて創作する」というものであった。

江戸時代後期の生まれで、明治・大正時代を代表した文人画家富岡鉄斎(天保7年(1836年)〜大正13年(1924年))は生涯で数万点に上る南画(文人画)作品を残しているが、「自分は儒者だ。画家ではない」と言い続けた。



→小川芋銭。芋銭は河童、漫画、挿絵、南画(文人画)を描いた。南画(文人画)を描く一方で老荘思想に通じ、書・詩(俳句・短歌)をよくした。